

昭和65年2月1日 第3種郵便物認可  
平成19年3月1日発行 毎月一回 一日発行  
俳句雑誌 沖 第55巻第3号

沖

俳句雑誌「おき」

3月号

沖  
発行所

# 高千穂神楽

能村 研三

## 遅筆の信念

杉 闇 の 濃 くて 黒 仁 田 神 楽 かな

夜 通 しの 神 楽 さ な か の 村 訪 ね

切 り 絵 御 幣 真 闇 に 映 え て 神 楽 舞 ふ

過 客 に も む す び ふ る ま ふ 夜 の 神 楽

遅筆堂こと井上ひさしさんが、一月の中旬に初日を予定していた、こまつ座の芝居「私はだれでしょう」公演を再々延期したことは、新聞でも話題になった。井上さんにとって自分の脚本の遅れによって芝居の初日が延びることは数回目だそう、井上ファンにとってはそんなに驚くことでもなく、「またか」という感じで受け止めているようだ。

遅筆で公演が延期になることは、特に芝居をうつ側にとつては大変なこと、役者の稽占の問題や、チケットの払い戻しなど大変だったと思う。芝居が始まった二月の中旬に井上ひさしさんにお会いする機会を得た。ご本人は平然としておられて遅れたことによる赤字も毎日予想以上の人が入ってくれるので、徐々に取り戻しているとおっしゃっていた。以前、井上さんにお会いしたとき二枚の色紙を揮毫していただいた。その一つは「沖」の三十五周年記念号にも掲載させていただいた「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめにかくこと」としてもう一つが「得意淡然

神楽中入り竹さかづきのカッポ酒

降臨の美少年舞ふ夜の神楽

神楽の順来ておもてさま賜はれり

神庭に注連密として冬ともし

※神庭Ⅱこうにわ

里人と同心の縁神楽宿

切溜にむすびが並ぶ神楽宿

失意平然」という言葉であった。この二つの色紙の内容をよく噛み締めてみると、井上さんがただ忙しく筆が遅いのではなく、本当に自分で納得するまで突き止めて書き上げていて、正に遅筆の信念といったものがあることがわかった。

私も白慢できる話ではないのだが、いつも原稿の締め切りには間に合わない遅筆の方だが、私の方は忙しいための遅延であって井上さんのそれとは違う。ただ、私たちも締め切り日に間に合わせるために原稿が緻密でなかったり、辻褄を合わせたりいろいろと反省をする面があるようだ。

ものを書く前に先の井上さんの言葉を心に秘めて書いてみなくてはいけないと思う。

なお二月の終わりから市川で「井上ひさし展」が開催される。



能村 研三



岩礁の低きは嬉し初日波

老松に色は移さず初茜

老松は微動だにせず春の波

潮風に羽搏くこれも初雀

街に来て輪飾を吹く海の風

二日かな老松とはの艶<sup>あで</sup>姿

つて創立二年目の市川中学校に就職し、その二年後、「いい学校だから来ないか」と私を誘ってくれた。こうして私も創立二年目の市川中学校に奉職、古賀米吉校長の教育理念に心から賛同していった。

旧職、第二回卒業生（昭和25卒）

の一人、柳田進君が自著『われわれの市川中学校時代』を携えて訪れ、私に贈ってくれた。B5判で上下二巻併せると五二〇頁の大冊である。同君は登四郎氏の担任した教え予だから、登四郎氏については38頁を費して書いている。私は担任ではなく、国語・漢文等の授業をしただけが私についても30頁を費やしてくれた



# 蒼茫集



ものの泡

千田 敬

去年今年汀に生くるものの泡  
初口の出ルネッサンスの沖にかな  
硯海のをきをふくみ筆始  
買初の歳時記にわが一句見ゆ  
薦枯れて蔵に明治の技の皓  
佗助の一花こぼれてテレビ絶つ

先つちよ芽

北川 英子

結び柳そのしだり尾の先つちよ芽  
老いてこそ相寄るいのち初霞  
がうがうと凍つる間のなき直下滝  
冬苺あつげらかんと孫の恋  
陰笛の陰のまま去り白障子  
冬桜影も落花も風となり

まぼろしの馬

辻 美奈子

元朝はまだ胎内のくらさかな  
初雀鳴いてゐるからさう思ふ  
透くるまで枯れ葦原の中つ国  
氷柱輝くまぼろしの馬に角  
初雪のすぐに終つてしまひけり  
自鳥は微熱を以て浮かびけり

枝の杖

久染 康子

鳥総松雨滴の花を咲かせけり  
水とまだしつくりゆかず初氷  
凍滝の大岩棚を孕みをり  
探梅行いつの間皆枝の杖  
細雪艇庫の裾を埋め尽す  
極太のもがり笛聴く麁番屋

長子の系 藤原照子

声かくる後先もなき冬至風呂  
連峰のまさかの位置に初日の出  
年酒酌む長子の系のつながらず  
かの世まで秘むるひとこと七日粥  
咳込むや身の内にある噴火孔

琅 玕 渡 辺 昭

御目を伏せ賜ひし半跏初明り  
寒鯉の鯉のくらやみ息づける  
琅玕の竹吹き撓ひ小正月  
凧の日のひかり真つ直ぐ野水仙  
水縊りて速き小流れ落椿  
こころして背筋を反らせ寒土用

明 星 吉 田 陽 代

吹雪止み校塔空に甦る  
雪の夜や壁に二連のたうがらし

群れ立たず脚いためしか寒雀  
寒北斗そして身近にあきら明星  
守られて寒の一日はじまりぬ  
晩年のことば尊ぶ水仙花

冬 浪 遠藤真砂明

神・吉田明様  
冬菊の香にますらをを偲ぶ会  
吹きあげし風に枯葉のひかり渦  
青空は生きる眩しさ十二月  
荒牡蠣を剥くすばやさの刃のひかり  
七十路へいのちはじめの初明り  
冬浪の高鳴る一の鳥居かな

六腑を正す 都筑智子

草石蚕てふ五重塔のごときもの  
神州の二日に詣で孔子廟  
子へ孫へ六腑を正すなづな粥  
鯛焼の熱くて坂を駈け下りぬ  
負けの日は眉より深き毛糸帽

# 潮鳴集

鋭角 坂ようこ

黒靴は鬨ふ靴や冬木の芽  
削ぎ残るものの鋭角寒昂  
まゆ玉にぼんぼん時計鳴りにけり  
凍裂の響き貫けたり羽黒山  
綿虫に思慕の重さのありにけり

探梅行 林 昭太郎

アスピリンまだ効いてゐる探梅行  
滝といふ急ぐ容の凍てゐたる  
号泣に伏すと仰ぐと冬銀河  
簡潔な自息吐きて退職す  
冬草や父より継げる爪の反

鶏鳴 掛井広通

マスクして双耳たちまち血の通ふ  
鶏鳴の一声のみの淑気かな  
息白し眼鏡掛けても外しても  
毛糸編む母の十指は色の中  
一葉ともなれず冬枯道をゆく

日曜日 大川ゆかり

大根煮る母性育ててをるやうな  
寒スバル風呼ぶごとく馬頭琴  
麦の芽や海の平らな日曜日  
酒蔵に住む魂ありぬ初氷  
悩みなど無しとマフラー巻きながら



# 沖作品



# 能村研三選

雪吊に奏でてみたき百の弦

東京

小嶋 洋子

冬うららダリの時計のやはらかに  
展望室雪の孤島となつてをり  
標的となるかもしれない枯野行く  
天窓から黙示のやうな冬日かな  
快晴の廂重ねて熊手市

茨城

内山 花葉

ダンボールみんなで運ぶ聖夜劇  
調弦に寒星一つづつ点る  
乗初の筑波新線富士へ発つ  
糸でんわより息はづむ御慶かな  
ミシン目を切り取り冬日あふれけり  
けんかしてまた湯豆腐のなかにをり

千葉

篠藤千佳子

今日といふ真ん中に置く冬林檎  
おほらかに海鼠のやうにねむりたる  
地下室はボクシングジム冬銀河

倚りかかりたきときもあり冬木立

長崎

小林 奈穂

返り花潮の匂ひの美術館  
石鱈の十二角形年新た  
ブローチの位置を正せり弥撒始  
七草や母にもらひし割烹着  
霧を着てうつつ抜け出す千曲川  
数へ日のとんぼ返りの発車ベル  
霜のこゑ聞の螢光時計浮き  
冬の海暮れてムンクの「叫び」聞く

市川市

宮島 宏子

双六で終の地めぐる顔よせて  
流れゆくもの雲と水ひよんの笛  
雲分けし日の差してゐる枇杷の花  
枯棚田水音風音落しけり  
水仙の蕾を擡ぐ凜々しさよ

東京

おかたかお

上弦の月に膨み冬桜

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

雪吊に奏でてみたき百の弦 小嶋 洋子

「雪吊」は、俳句の素材として多く詠みこまれてはいるが、この句のように雪吊の形象を一つの楽器に見立てたのは中々めずらしい。雪吊は本来は脇の枝が雪の重みで折れるのを防ぐため、幹に添えて高く支柱を立てて、それから縄や針金を垂らして枝々を丹念に吊り上げる。特に、金沢の兼六園にある雪吊が有名で、張り渡された吊縄がちょうど傘のように見えて美しい風情を見せてくれる。本来は、雪が降って雪景色の中で見る雪吊も美しいものだが、今年のような暖冬では雪の降らない雪吊であっても仕方がない。雪吊り縄の張り方は、一定の規則があつて幾何学的な線形は、職人の腕の見せ所でもある。冬の庭園に一際美しさを放つ雪吊からは何か心地よい弦の響きさえ聞こえてくるような気がする。

調弦に寒星一つづつ点る 内山 花葉

この句は厳密に言うとは棲が合わないところがある。調弦は「弦楽器の弦を正しい音高に整えること」とあるから、もちろ

んその作業をする場所はコンサートホールやスタジオなど室内である場合が多く、そこからは天空に光輝く星の姿など見えるはずはない。しかしこの寒星と調弦があきらかに同時に出会わなければならないことはない。この寒星の輝きはコンサート会場に入る前の夜空に輝いていたものであつて、その美しさの余韻をもつてホールの一席に座ったのかも知れない。調弦によつて、それぞれの弦楽器が一つ一つの音色を整えていく様子は星の一つ一つが点つていくのと何か似ているように思えた。

けんかしてまた湯豆腐のなかにをり 篠藤千佳子

省略された中にも、一つのドラマを展開する内容が面白い。夫婦二人きりの夕食の場面と勝手に想像させていたたく。些細なことで始まった夫婦喧嘩、どちらからも折れることなく喧嘩はまだ続いているからと言って、一緒に食事をしないほどでもない。湯豆腐の鍋を囲んでしばらく沈黙の時間が続く。鍋の中のあたたかい豆腐をお互いに箸でつつきながらもそれでもまだ仲直りをする気配は感じられない。

石 鹼 の 十 二 角 形 年 新 た 小林 奈穂

普通の石鹼だと、白くて楕円形のかたちをしたものだが、ちよつと高級感のあるものだとお洒落に出来ていて、色もカラフルで十二角形のかたちをしていたのだろう。包装を解いたとたんによい香りがして何か贅沢をしたような気分になった。普段だったら、そんな高級な石鹼など使わないのだが、年も改まることを機会に使う気になったのだろう。(以下略)